
ネットに探偵が知りたい情報は一つない

パンター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットに探偵が知りたい情報は何一つない

【Nコード】

N5462U

【作者名】

パンター

【あらすじ】

オレは探偵だ。訳ありの中年男性から娘と駆け落ちした男性を見つけるように依頼される。どういうことだ？

（前書き）

別に某ラノベ原作のアニメ化作品にケンカを売っているわけじゃないからね！

作家矢作俊彦は言う「探偵^{オウ}は二流のインタビュアーだ」と。

一流のインタビュアーは取材に自身の感情を交えてはいけない。

だが探偵は自身の感情を交えざるを得ない事件^{トラブル}を扱う。私立^{プライベート}の探偵^ブならなおさら。

表沙汰に出来ないセレブのスカンダルや家庭内の問題の解決、政治家や財界の家族の誘拐^{ネゴシエーター}の交渉人役、時として裏社会の抗争の調停役も行う。社会の裏側から人を見つめることの多い稼業ゆえの愚痴が思わずこぼれてしまうのだ。

調査で様々な人と出会い、会話する。一流ならばどんな状況にも心を動かされてはいけない。

だが、二流ゆえにつながる人間関係もある。そのネットワークは稼業にとっても役立つ。

「それで、どういった依頼ですか？」

ここはおれの事務所だ。繁華街から一本裏通りに入った路地に面した雑居ビルの二階に事務所を構えていた。

「チンピラを一人探して欲しい」

対面する依頼人はヤクザにはとても見えない高級そうなスーツを着た中年の男だった。しかも職業から来るものなのか堅苦しい空気を発していた。

「そのチンピラに何のようです？アナタがそいつの兄貴分には見えないが」

「私はその筋の人間ではない。そいつに娘を連れ去られたのだ」
なるほど。そういう方向か。

「誘拐ですか？」

「違う。娘も同意の上だが、私は納得していないのだ」

ははあ。駆け落ちということか。それでその男に激しい敵意をいだいている、と。

「娘さんを連れ戻すよりも、その男の方に用があるということですか？」

「娘はいつでも戻ってくる。私が望めばいつでも」

「???」

「どういう意味だろうか？」

「娘さんの居場所は知っているのですか？」

「ああ。常時モニタリングしているからな」

「なんだか、変な方向に行こうとしているな。」

「携帯のGPS機能で娘さんの居場所を知っているとか？でしたらおれを雇う理由がわからないな」

「彼女のは携帯とかそういうものではない。それに君には連れの手ピラを連れてきて欲しいのだ。こいつの居場所はモニタリング出来ないからだ」

「よく分かりませんが、その男性は娘さんと一緒にいるのですか？」

「多分。あいつは何も知らないから。知ってからでは遅いのだが」

「何をです？この調査に必要な内容なら知っておく必要がある」

「今は言えない。まだ依頼を受けていない探偵には言えない」

依頼を受ければ依頼人の個人情報に対して守秘義務が生じる。受けなければ探偵としてのモラルを無視すればリークすることは違法ではない。二度と仕事は出来なくなるが。

最近依頼が来なくて経済状態が苦しかった事もあり依頼を受けた依頼人から改めて事情を聞いて緊急性を感じた。

確かに、早く見つけ出さないと。

ただおれが想像していた娘がロボットオチはなかった。彼女は人間だった。

秘密は別の意味で震撼させるものだった。

「それで、娘さんはどこにいるんですか？」

依頼人は正確に場所を名指した。

なるほど。依頼人のような連中が乗り込んでいたら目立つわな。しかもどこかで顔を見知ったものがいたら不審がること間違いなし

だ。一応おれはまだ20代なのでセーフだろう。

繁華街の若者向けのショップが集まる通りにあるコスプレ喫茶。

彼女はそこでアルバイトをしていた。

見た目十代半ば。小顔の美少女だ。華奢な体つきに不釣り合いな胸の張り出し感。コスプレ服だけのせいではない。何より真紅の瞳はコンタクトによるものでなかった。

少年課の刑事のふりをして家出捜索が出ているという名目で彼女を店の外に連れ出した。

「で、一緒に駆け落ちした彼氏はどこへ行ったのかな」

「さあー。わかんないニヤン」猫耳メイドのコスの彼女はふざけて答えてきた。

「まさかもう…」

「ニヤン。ニヤニかな？」

「お父さんが乗り込んでくるぞ。おれと交渉して円満に解決したほうがいいぞ」

「それは困ったニヤー」

彼女は両手を握り手首を招き猫の前足のように曲げてポーズを取っている。ナメているのか、別にお父様は怖くないということか。

「希少生命体保護条例対象体10098号。保護施設のお父さんは怖くないということか、吸血鬼^{ヴァンパイア}」

「そんな事はないニヤー。だけど、だからといって私を滅ぼせないのもまた事実ニヤー。何せ保護対象の希少生命体だから、私は」

地球上で多発する異常気象や汚染された環境下で生き延びるために、人間が生まれたままで成長せず強化改造処置が当たり前の世界で、天然の吸血鬼や狼人間とかの希少生命体は保護されるものになっていた。だがその存在は一般的には知られていない。世界の宗教組織の中にはそういった生命体を悪魔の下部として存在を認めていない教義を持つものもあり、いないものとして政府の秘密機関によって管理されていたりするのだ。

さっきも彼女が言ったとおり基本彼女らは保護されているので危

害が加えられることはない。

ただしそれは人間に危害が及ばない限りだ。

出来る限り穩便に済ませたいからおれというクッション役に交渉させているのだ。

秘密機関といつても彼らは保護官なのであって、荒事は好まないのだ。

しばらく睨み合う。しかし恋が芽生えるような甘い視線の応酬ではなかった。

「彼は無事ニャー」彼女が根負けした。

「アパートに居るニャー。多少は吸ったけれど、私は彼を愛しているから枯れるまで吸う事はしないニャー」

「…そうか。で、どうするんだ」

少し考えて彼女は言った。

「彼と、生きていきたいニャー。だからお父さんとは話し合う」

「そう伝える。お父さんには」

オレは彼女を信じた。おれの探偵としての勘もそう語りかけてきた。

彼女の目は嘘は言っていない。恋する乙女のそれだった。

おれは彼女と分かれ、事務所に帰ることにした。

特殊な人々の普通の事件。この世にそんなに大事件は起こらない。そんな余計な感想を持つおれは二流のインタビュアー、探偵ということなのだろう。

おれに似合いな職業だと思う。それでいいじゃないか。

（後書き）

矢作俊彦氏の作品は好きです。マンハッタンオプは傑作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5462u/>

ネットに探偵が知りたい情報は一つない

2011年7月3日03時10分発行